2012年05月14日 中日新聞 朝刊 25頁

遠い現場 消えぬ炎

前回の「備える」では、中部地方を東海、東南海、南海の三連動地震が襲った時、津波だけでなく家屋倒壊による圧死も警戒する必要があると伝えた。さらに、家屋が倒壊すれば、街をのみ込む大火災が命を奪う。一九五年一月十七日の阪神大震災では、住宅や工場が密集する神戸市長田区で五千棟近くが全焼。死者九百二十一人のうち焼死は約五百人を占めた。三連動地震が起きれば、その被害は「阪神プラス東日本」といわれる。阪神の教訓から、火災への備えを考えたい。（竹田佳彦、中村禎一郎）

長田区 5000棟全焼、500人犠牲

到着遅れ放水も無力

■住民から罵声

髪の毛が燃え、肉の焼ける臭いがする。「どこの家も脳裏によみがえる。「どこの家で助けられなかったか、全部覚えとるよ」。神戸市垂水消防署に勤務していた元消防士野村勝さんもが振り返る。

地震発生後、本部の要請で長田区へ向かった。長田消防署のポンプ車は四、五台だけ。通常なら民家一軒の消火で手いっぱい。火災は二十カ所以上で起きていた。

垂水区から向かう道に倒壊した家が積み重なる。垂れ下がる電線に動揺した住民から罵声が浴びせられた。神戸市垂水区の風景。同じ場所で当時の写真を示す野村勝さん

前八時すぎに到着した時、黒い煙が街の上空を覆っていた。

「何としるんや。遅い。住民から怒鳴り声が浴びせられる。激しい言葉は「消防が何とかしてくれる」という期待の裏返しと痛いほど分かった。

防火水槽に吸水管を入れて消火を始めると十分後に水流が細くなり、がくぜんとした。一時間使えるはずの水槽は戦後間もなく作られ、ひび割れて水が漏れていた。消火栓も断水で使えない。五百メートル離れた川からホースをつなぎ合わせた。

「家の下におやじがおるんや。助けて」。住民の男性が指さす先に、道路にかぶさった瓦屋根があった。十メートルほど離れた隣家に火が迫る。男性は消火作業をやめさせて救助にあたらせようと、悲壮な表情で野村さんに体当たりしてきた。

「救助の時間はない。火を食い止めぬ車がホースを踏み越えるたび、穴があいて水が漏れた。交換する間に火は勢いを増し、消防車の横に破れたホースが積み上がる。ようやく火が消えた時、家はすべて燃え尽きていた。「なんの効果もなかった」

「救助の時間はなく、家族の安否を気遣う住民の作業を続けたが、家族はすべて燃え尽きていた。「何とか考えられんかった。たのむ、自分の家だけ燃えるのに時間がかかっている気がしてね」。パジャマにスラックス、会社の制服を着込んだ練なんでしたことはない。消火器を備えた家も、猛烈な火勢の前に気休めにもならなかった。近くの井戸から水を住民約五十人でバケツリレーして燃え上がる家にかけたが、効果はなかった。

火災が集中した長田区、会社の倉庫六棟のうち五棟が全焼した自動車部品会社経営、田中保三さんは「合成繊維や自動車部品、機械油など燃えやすい物を扱う会社が集まっていた」と指摘する。

「住民自身が地域のこさや火災の広がりやすさを知っとく必要がある。火事の怖さが分かるし、地震の時の心構えにもなる」と教訓を話す。

次回は21日掲載。震災直後のトイレについて考えます。

震災の火災で景色が一変した神戸市長田区の風景。同じ場所で当時の写真を示す野村勝さん

「消防士10倍でも無理だった」

緊急車両 中部の 1万人超で1台

大火災が起きれば消防はすぐ到着できないし、着いたとしても消火できない。阪神大震災で明確になった問題は、現在の中部地方でも全く変わっていない。

阪神大震災で燃え上がる市街地＝1995年1月17日、神戸市長田区で

中部地方の消防力

	ポンプ車数	ポンプ車1台当たりの人口	救急車数	救急車1台当たりの人口	人口
愛知	319台	23400人	219台	34000人	746万人
岐阜	162台	13000人	126台	16800人	211万人
三重	141台	13400人	104台	18200人	188万人
静岡	174台	22000人	137台	28000人	383万人
長野	160台	13500人	117台	18400人	218万人
福井	75台	10900人	48台	17000人	81万人
滋賀	67台	21100人	58台	24400人	141万人

※全国消防長会の資料から作成。人口は千人以下切り捨て

ポンプ車や救急車は消防庁の基準に沿って人口規模により配備されている。あくまで通常の火災時に不足がないよう設定した台数。

救急車も四十三台中部各県では、ポンプ車や救急車一台当たりの人口はいずれも一万人を超える。非常時には他の地域から応援が駆けつけるが、その時に道路が使えるかは分からない。

例えば、名古屋市消防局では通常、火災が一件発生すると十一台が出動する。消防局が保有するポンプ車は非常用も含めて百六台。十件で手いっぱいの計算となる。このため、阪神大震災のような大災害時には、火災一件に一台のポンプ車を出す計画だ。

消防局は「一台では限界があるので、住民の避難誘導や延焼阻止で精いっぱいになるだろう」と万全の態勢でないことを認める。

かなく「動けぬ人は自分で病院や避難所の救護所に行ってほしい」（消防局）。そもそもは一一九番通報の受け手は三人で、大災害時は混雑して電話がつながらない恐れがある。

消防局は「財政の緊縮が進む中、消防は現状を維持させてもらっている。それだけでも例外扱い。今以上に増える予定はない」と説明する。消防に頼りきる姿勢では、大災害を生き残れない。

■地域を知る

長田区の会社員小林克郎さん(56)は、家の前の公園で五十年間、家がなくなるのを見る。「来るな。止まってくれ」。道路に倒れかかった家が火の通り道になると、一気に燃え広がった。

「それまで地区の火災は消防任せ。防火訓練が足りなかった」。

だが、いつまでたっても消防車のサイレンが聞こえてこない。その間に火災は上昇気流を生み、海風にもあおられた火が道路を越えた。

「来るな。止まってくれ」。道路に倒れかかった家が火の通り道になると、一気に燃え広がった。

「それまで地区の火災は消防任せ。防火訓練が足りなかった」。

火災害時は、火災一件に一台のポンプ車を出す計画だ。

消防局は「一台では限界があるので、住民の避難誘導や延焼阻止で精いっぱいになるだろう」と万全の態勢でないことを認める。

救急車も四十三台中部各県では、ポンプ車や救急車一台当たりの人口はいずれも一万人を超える。非常時には他の地域から応援が駆けつけるが、その時に道路が使えるかは分からない。

例えば、名古屋市消防局では通常、火災が一件発生すると十一台が出動する。消防局が保有するポンプ車は非常用も含めて百六台。十件で手いっぱいの計算となる。このため、阪神大震災のような大災害時には